

KA JI MARU

鍛冶丸

第3号

平成27年
3月1日



郷土史を訪ねて 「千保川を呑む」 ①源流域編＝「三笑楽」で味わう



大槻伝蔵の碑 《富山県南砺市(旧・平村)祖山》

千保川を呑む事業

千保川や庄川流域の歴史文化に理解を深め、地酒を味わう郷土史探訪ツアー



帰雲城址 《岐阜県大野郡白川村保木脇》

主な内容

- ・ 高岡御車山は、ミステリアスだ! 2
- ・ 「高岡城跡」国史跡指定に想う 3
- ・ 「歩く博物館」に参加して 4
- ・ 千保川を呑むツアー参加報告 5
- ・ 高岡における鉄道の歴史と北陸新幹線 ... 6
- ・ 高岡鋳物師祖先の物語 7
- ・ 博物館でお抹茶を! 7
- ・ 越の彼岸桜 8
- ・ 博物館の催しご案内 8

高岡御車山は、ミステリアスだ！

高岡市立博物館に親しむ会 研修部会長 樽谷 雅好



私は今年の大まかなテーマとして、「高岡御車山祭」を定説や常識に流されることなく歴史的・民俗学的に追及してみたいと考えている。この祭礼が、実はミステリーすなわち「謎」だらけであり、恥ずかし乍ら未だほとんど解答を見出す事が出来てはいないからである。

今、高岡御車山の「ミステリー＝謎」の例を、一寸だけだが思い付くままに挙げてみよう。

- 一、御車山は何故、金沢や富山でなく高岡に残されたのか？ もしや、豊臣秀頼からか？
- 二、高岡御車山祭は、前田利長が始めたのか？ 利長は確かに立派な地車などの提供者ではあろうが、かつて調査した文部技官が昭和30年の講演会で「浄土真宗以前の古い時代の祭礼様式ではないか」と語っている。
- 三、そもそも、何の祭礼なのか？ 病災厄除か？ 豊穰祈願か？ それ以外なら、何なのか？
- 四、春祭りの筈であるのに、何故に花傘が、秋祭り仕様と思われる「菊花」なのか？
- 五、「山町」から始まった祭礼なのか？ 元は「木町」にあった祭礼か？ 他地域からなのか？
- 六、二番町の「宵祭」だけが、何故に飛び抜けて厳格な様式なのか？ 「遷宮」の意味は？
- 七、関野神社の御神輿が何故、屋に極楽寺(博労町)を訪れるのか？
- 八、高岡御車山の巡行路において、①何故、極楽寺(博労町)に詣るのか？ 二番町のみ？
- 九、高岡御車山の巡行路において、②何故、「下八町」を曳行するのか？
- 十、津幡屋与四兵衛の「実像」を伺わせるものが、何故はつきりと残されていないのか？

取敢えず、これらの事柄の「謎解き」が為されないようでは、この祭礼は理解できないと思われる。但し、これらの事を調べるためには、一般的に「先宮(まずのみや)」という極めて重要な媒介変数(パラメーター)が必須であるが、これがまた飛んでもない曲者なのだ。(尚、私見では「先宮」に相対置しているのが、関野神社の別称「高の宮」と思われる。)

以上の「謎」に関する私の「案＝提言」につき、市民による大いなる論争の惹起を冀うものである。



極楽寺(博労町)に詣る … 関野神社の御神輿(左)と、二番町の高岡御車山(右)



「高岡城跡」 国史跡指定に想う

高岡市立博物館主査学芸員 仁ヶ竹 亮介

昨年11月、文化審議会は「高岡城跡」を国史跡に指定するよう文部科学大臣に答申した。平成27年1月末の現在、指定の発表を今か今かと待ちわびている。というのも、この指定申請にあたっての詳細調査に多少関わらせていただいたからである。さらに、何よりこの城跡(というより公園)に対しては、私の子供の時よりの遊び場であり、今では「職場」でもあり、並々ならぬ思い入れがある。

そのような思いは、古くは前田利長や利常をはじめ、高岡が城地として江戸・大坂をしのぐ「天下ノ座城」と絶賛した町奉行・小川八左衛門、公園指定に奔走した服部嘉十郎、公園整備に尽力した鳥山敬二郎、公園の夕景を愛でた室崎琴月、夢を語り合った藤子・F・不二雄と藤子不二雄^④などなど数々の「高岡人」たちも思い、抱いていたに違いない。

恥ずかしながら私自身、“遊び場”であった古城公園を「城跡」という貴重な歴史的文化的文化財(史跡)として真に認識したのは、平成18年、日本城郭協会による「日本百名城」に県内から唯一、高岡城が選ばれてからである。正に「灯台下暗し」、余りに身近過ぎたのだ。それから調べ始めると、知れば知るほどこの城跡は史跡としての価値が高いものだと分ってきた(今ではすっかりお城ファンになり、「日本百名城スタンプラリー」にハマってしまっている)。城郭協会曰く、高岡城は著名な高山右近による縄張伝承(最近は疑問視もされているが…)があることや築城当時(1609年)の堀や郭、つまり縄張の保存状態が極めて良好であり、当時の設計思想の基準になりうるということが最大の選定理由であるという。

高岡城跡の価値は特に堀(水堀)の保存状態が良好なことであろう。築城以来、全く埋め立てられていないのだ。そんな城跡は他になく、個人的には全国ナンバー1だと思っている。しかし市教委曰く、他に二条城・弘前城・五稜郭も良好であるという。この機会にちょっとそれぞれの担当部局に質問してみると、二条城は家康築城期から秀忠が拡張する際に一部埋め立てているとのこと。弘前城(偶然にも別名は「高岡城」)は「西濠はだいたい当時とは変わっているみたいです」とのこと、五稜郭は改変なしとのこと。結局やはり、高岡城が1位(タイ?)である、といえそう(客観的には明治40年の中島造成の堀拡張を改変とみなされるでしょうが…)。

歴史的には築城の詳細な経緯をたどれる20通弱の「前田利長書状」が現存していることが実は全国的にも特筆すべき貴重な事例である。また明治8年という早い時期に公園指定された「近代公園」としても重要で、特に京都の小川治兵衛、東京の長岡安平という日本近代造園史上に名を馳せる、東西を代表する造園家



高岡城跡全景

園家に関与していることも見逃せない。まだまだ語り尽せないが、これから国史跡として整備が始まるなか、何より将来の「全面発掘」に大いに新発見を期待したいところである。

高岡城跡には天守閣や門、櫓など城をイメージさせる分りやすい構造物が無く、石垣などは教えられなければ気づかない人もいるかもしれない。しかし、数々の魅力を秘めた高岡城跡は、噛めば噛むほど味の出るスルメのような、「上級者向け」の城跡といえましょう。

「歩く博物館」に参加して

会員 武部孝則

高岡に住んで40年を超えたが、幼少期からではないので生活圏以外はほとんど知らなかったといっぴよい。「歩く博物館」というネーミングに誘われて参加した。

第8回は万葉線沿線の郷土史を巡るコースであった。始発の高岡駅で、富山県で最初の鉄道である「中越鉄道」(現城端線)の歴史を聞き乗車。「荻布」で下車し、荻布天満宮と二上山にまつわる人身御供の伝承を聞く。俵藤太がこんな所にもでてくるのかと、驚きを禁じ得なかった。「新能町」まで歩く。電車通りに直交する放生津往来は芭蕉が加賀へ向かうのに使った道だという。芭蕉が急に身近な存在になったような気になる。

次に六渡寺で降り、街中を歩いて海ぎわの六渡寺日枝神社を訪れた。平安時代には、「六度(渡)寺神人」の名がすでに古文書に出てくるそうである。鳥居の笠木には三又の破風を乗せ、さらにその上に横石を置いた全国的にも珍しい鳥居で、初めて見るものであった。

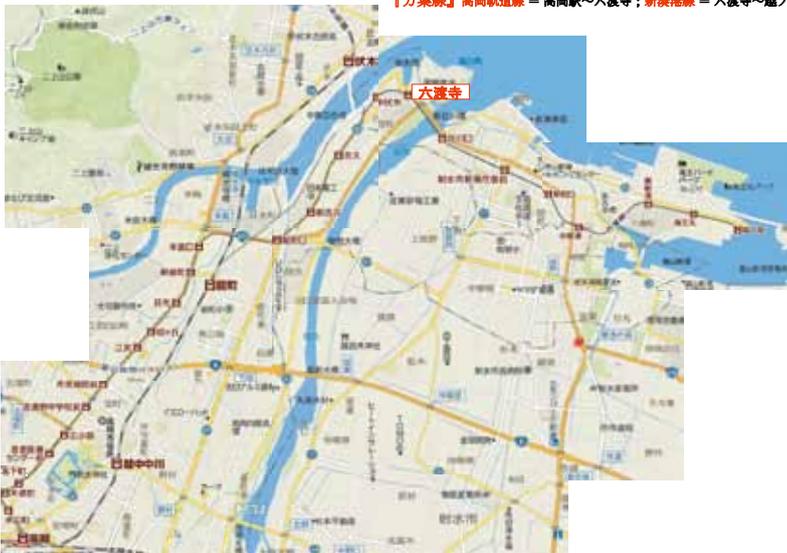
第9回は高岡大仏と高町の路地を調べるコースであった。大仏さんでは地獄絵図が怖かったという幼い時の強烈な記憶が残るが、何人もの画家がいろんな絵を描いているのを見て、この記憶はかなりの部分大人に植え付けられたものだと思改めて思った。大仏飲食店街を通ったのは初めてで、こんな機会でもないとは歩いてくはないであろう。

歩く博物館 —1万歩ウォークでふるさと再発見—



第8回 9月10日(水)
万葉線で郷土史を周る

【万葉線】高岡軌道線 = 高岡駅~六渡寺; 新湊港線 = 六渡寺~越ノ湯



猫電車を待つ!



新湊大橋「あいの風プロムナード」を歩く!



六渡寺 日枝神社



荻布 天満宮

第9回

11月5日(水)
高岡大仏と高町の路地を調べる



ホテルニューオータニ高岡前「御旅屋跡」



高町の路地を歩く



片原町を歩く歩く！

千保川を呑むツアー参加報告

■平成26年10月28日(火)実施

会員 開 三 信



ひるがの分水嶺公園



流刑小屋

この度、粋な事業を実施していただき感謝します。

今回は、千保川からの郷土史を見つめ直す事業の第1回目「源流域編」として25名の郷土史愛好家とお酒愛飲家の熱い情熱に包まれてまずは出発した。最初に千保川の源流ひるがの分水嶺公園に到着し、そこを北上。戦国時代ある日突然に山の崩壊により消滅した「帰雲城跡」を見学。ドラマなどでは埋蔵金伝説まで飛び出す不思議な城跡であった。原因となった山崩れ跡を見ながら伝説と歴史の現実を再認識した。



加賀騒動と五箇山の講演会

続いて、加賀騒動大槻伝蔵の流刑小屋を見学。近くの五箇山荘にて樽谷雅好氏のパワーポイントを使つての「加賀騒動と五箇山」の講演、賛否両論の評価が残る中、大槻伝蔵が前田吉徳にとりたてられ、そして没落・流刑になるまでの経緯についてユーモアを交えた講話を楽しむ。講演会終了後、五箇山料理と郷土の地酒「三笑楽」を堪能し会員の交流も兼ねての会食を楽しみ、これまでにない友好の機会であった。そして、勉強疲れと適度の酔い心地よさで帰路に着く。



三笑楽を大いに飲む

今回の1日研修は、五箇山が流刑地となるなど秘境とのイメージが定着しているが、実は「帰雲城」に見られるように、日本海側と東海地方を結ぶ数少ない交通路の一つであり要衝でもあったとの認識をあらたにしたのが収穫であった。今後、上流域・中流域と展開していくが新たな発見を期待して、更に多くの歴史愛好家の皆さんが参加されることを願って報告とします。

高岡における鉄道の歴史と 北陸新幹線

高岡市立博物館学芸員 藤井 恵里



「北陸新幹線車両・W7系」JR西日本提供

昨年、当館では「夢はこぶ“かがやき”－軌道117年のあゆみ－」と題した特別展を開催しました。本展では、平成27年の北陸新幹線開業にあわせて、当館が収蔵する富山県内外の鳥瞰図や地図、鉄道関係資料等を中心に展示しました。鉄道交通の発達、人々の暮らしを豊かにそして便利にする一方、単なる交通・輸送手段としてだけでなく、そこに暮らす人々の夢やワクワク感、明日への希望も運ぶものとしても大きな役割を果たしていました。本稿では、高岡における鉄道の原点、その歴史について振り返ります。

1. 民営中越鉄道と官営北陸鉄道の開通

日本国内における初めての鉄道開通は、明治5年(1872)10月14日の横浜－新橋間にさかのぼります。北陸における鉄道建設運動の先駆けは、明治14年(1881)の私設東北鉄道や、同21年(1888)島田孝之らが申請した私設北陸鉄道でしたが、実現には至りませんでした。

民営中越鉄道(株)は明治28年(1895)吉田茂勝と島田が、大矢四郎兵衛ら砺波郡の地主をまとめ設立されました。明治30年5月には、黒田(高岡市)－福野間に県内初の鉄道が開通し、現在もJR城端線・氷見線として活躍しています。官設北陸鉄道(現・JR北陸本線)は、明治31年に金沢－高岡間、翌年には富山まで開通し、大正2年(1913)には全線開通の運びとなりました。

2. 高岡駅の変遷

高岡駅の歴史は、明治30年(1897)下黒田に置かれた中越鉄道(株)の黒田仮駅を前史として、翌31年(1898)1月に同社の、そして11月に完成した官営北陸鉄道高岡駅を初代としています。2代目は、大正5年(1916)9月に改築されました。3代目は民衆駅として、昭和41年(1966)11月に「高岡ステーションビル」が開業しました。同時に駅前広場も完成し、同45年には駅前地下街も建設されました。平成26年(2014)3月29日には、4代目高岡駅「^{クルン}Curun TAKAOKA」が完成し、駅前広場や駅地下街などの改修・整備が行われ、高岡の新しい玄関口としてスタートしました。

3. 特急列車の登場と北陸新幹線

昭和36年(1961)北陸線初の特急「白鳥」が登場し、同39年の金沢－富山間における電化完成以降、多くの特急が走り始めました。

北陸新幹線は、昭和40年(1965)「北回り(東京－北陸－大阪)新幹線構想」の提唱に始まり、同56年1月には国による北陸新幹線の優先着工が決定しました。本県初の着工は平成4年(1992)8月の石動－金沢間であり、同17年6月には富山－金沢間が着工の運びとなり、同24年9月には「新高岡駅」の着工、翌年10月には北陸新幹線の4つの列車名称(かがやき・はくたか・つるぎ・あさま)が決定しました。半世紀の時を経て、ついに本県を含む東京－金沢間は、平成27年3月14日に開業の運びとなる予定です。



中越鉄道 高岡－伏木間開通後、米島の鉄橋上での記念撮影
(明治33年 高岡市蔵)



「中越鉄道株式会社線路略図(『中越鉄道 開業二十周年誌』付属図より)」
(大正5年 高岡市立中央図書館蔵)



会員の広場

高岡鑄物師祖先の物語

広報部会長 般若 慎一郎

「仁平の故事」という次のような言い伝えがある。仁平3年(1153)、毎夜生あたたかい風が吹き宮中の灯火は一斉に消え、怪鳥が出没し近衛天皇が悩まされ病気になった。そこで宮中へ高貴なお坊さんを招き、祈禱を何度もされたが効果がなかった。その頃河内の国丹南郡荘園を領有していた御蔵民部大丞紀元弘(ミクラミンブのダイジョウ キのモトヒロ)が、河内鑄物師の頭だった天命に鉄燈籠を108基鑄造させ献上したところ、この燈籠の火は悪風が吹いても消えなかった。こうして禁裏は日中のように明るく見通せるようになり、怪鳥(鶴=ぬえ=頭は猿、体は狸、手足は虎、尾は蛇という怪物)は弓の名手である源三位頼政が射止めた。

そして天皇の苦しみも無くなり病気も平癒したので、天皇は大変感激され「天命」という名前を「天明」と改めるよう仰せつけられた。そして、以後毎年燈籠を献上するよう命ぜられると共に「藤原朝臣」の姓を賜り、そのうえ河内鑄物師は鑄物業の独占権や税免除などの特権を賜った。鑄物資料館に展示してある「仁安の御綸旨」にはそういう特権が書かれている。このことから蔵人所燈籠供御人(くごにん)に任ぜられ毎年輪番で燈籠を献上し、真継家を通じて朝廷の支配と保護を受けるようになり、御綸旨は高岡鑄物師が明治に至るまで加賀藩の保護を受ける根拠にもなった。日本中の鑄物師にとって、とても重大な事件だったのだ。



燈籠

昨年9～10月に高岡市美術館で開催された「江戸の劇画家 歌川国芳の世界」の作品の中に「近衛院に怪鳥あらわれる」「源三位頼政鶴(ぬえ)退治の図」を見つけた。これはまさしく仁平の故事の場面なのだが、出所は平家物語であることが分かった。ところが殆ど同じストーリーだが、平家物語には河内鑄物師や鉄燈籠が登場しないことに気づいた。

仁平の故事は平家物語を元に後の世に脚色されたものではないかと想像されるが、鑄物師達が藤原朝臣を名乗り、毎年輪番で燈籠を献上し、真継家を通じて朝廷の支配と保護を受けたことなどは事実なのだ。作り話と史実が結びついて、何やら怪しげな歴史物語を作っているところに、興味を引かれつつ益々分からなくなっている。

仁平の故事は平家物語を元に後の世に脚色されたものではないかと想像されるが、鑄物師達が藤原朝臣を名乗り、毎年輪番で燈籠を献上し、真継家を通じて朝廷の支配と保護を受けたことなどは事実なのだ。作り話と史実が結びついて、何やら怪しげな歴史物語を作っているところに、興味を引かれつつ益々分からなくなっている。



博物館でお抹茶を！

会員 林 律子

「あら、博物館にこんな素敵なお茶室があったなんて、知らなかったわ」「中を見せていただけのかしら」松聲庵の水屋で、お呈茶の準備をしていると、思わぬ発見を喜ぶこんな声が聞こえてきました。10月、私は「博物館に親しむ会の呈茶席」のお手伝いをさせていただきました。鍛冶丸の木々の梢を通して差し込む秋の陽は、さらに優しく感じられます。いらしてくださった方々は、手入れの行き届いたお庭やお茶室を、そして腰掛でお出しする一服のお茶を楽しんでくださいました。

この日「松聲庵」の床には、博物館所蔵の村閑歩画伯の軸が掛けられていました。「ほう、閑歩さんのお軸ですか」と郷土の作家による風景画をしみじみと鑑賞される方が多いのに驚きました。そして、鍛冶丸そのものが博物館であり、親しむ会の呈茶席は高岡の文化と市民をつないでいると強く感じ、博物館でお呈茶できることをうれしく思いました。

みなさん、博物館前に赤い野点傘が立っている日は、ぜひ松聲庵でお抹茶を！



松聲庵



親しむ会 秋の呈茶席

会場：高岡市立博物館 茶室 松聲庵

時間：午前11時～午後3時

参加料：300円(お抹茶とお菓子)

開催日：平成26年9月27日(土)

10月11日(土)

10月18日(土)

10月25日(土)

越の彼岸桜



やまたちばな参与・親しむ会 会員 沢田 健寿



タカオカコシノヒガン

高岡古城公園は、従来の「日本の都市公園百選」、「日本百名城」、「日本歴史公園百選」など5つの日本百選に加えて、昨年11月には高岡城跡を「国史跡」指定への答申があり、さらに高い評価を受けました。四季折々の美しさがあふれる高岡市民の誇りの場です。

古城公園は「さくらの名所百選」として全国に誇れる桜の名所でもあり、園内には18種約1,800本の桜があります。そのうち約7割がソメイヨシノですが、特筆したいのはコシノヒガン(95本)とタカオカコシノヒガン(42本)です。

この桜は築城後、砺波の十村が南砺地方に自生する美しい桜を献上したことに始まるとされています。昭和4年新品種として「コシノヒガン」と命名され、福岡町の合併前までは市の花木でした。(小竹藪北側に記念碑があります。)

近年、全国の「越の彼岸桜」には4つのタイプがあり、小竹藪の「越の彼岸桜」の中に一般に普及している花びらが丸く波打って咲く新品種が判明し「タカオカコシノヒガン」と命名され、記念碑近くの数本に名札があります。コシノヒガンの開花はソメイヨシノより一週間ほど早く、枳形堀道路沿いでは鮮やかなピンクの桜並木がとてもきれいです。

今年の花見は、是非、「タカオカコシノヒガン」をお楽しみください。

◆鍛冶丸編集部では高岡市観光ボランティアガイド「やまたちばな」のご協力のもと「高岡古城公園」の魅力が4回シリーズで企画しました。

博物館の催し ご案内 ※いずれも入館・受講料無料

講座名/内容	開催日	時間	備考
■おもしろ講座・高岡のみじかい話 「皇太子行啓と高岡」	3/12(木)	午後2時～午後2時40分	講師 中村学芸員補
■館蔵品展「高岡捺染の祖・笹原文次資料展」 近代高岡捺染の創始者・笹原文次は、新たな染色技術の開発・研究に力を注ぎ、その生涯を通じて捺染業界の指導・発展に大いに貢献した。当館収蔵の関係資料を展示・紹介する。	～5/6(水・振休)まで	午前9時～午後5時	
■常設展お宝コーナー「高岡の引札」 明治・大正時代、商業で賑わう高岡で配られた食品などの広告チラシ「引札」の展示。高岡山町の旧家・室崎家に伝わる引札を展示・紹介する。	～6/14(日)まで	午前9時～午後5時	

平成27年度 会員募集のご案内

高岡市立博物館に親しむ会では、随時会員を募集しています。博物館の活動を支援するほか、高岡の歴史と文化に親しみ、相互に親睦を図る活動を行います。あなたも会員となって、郷土への理解を深め、市民に親しまれる新しい博物館づくりに参加してみませんか。

■年会費

- ・一般会員 1口 1,000円
- ・賛助会員 1口 5,000円

■申込方法

入会申込書に必要事項を記入のうえ、会費を添えて「高岡市立博物館に親しむ会」事務局へお申込みください。

親しむ会では、各種部会のメンバーを募集しています。

1. 研修部会 事業企画、歩く博物館等サポート
2. 広報部会 会報誌「鍛冶丸」の作成
3. ワークショップ部会 呈茶席運営・サポート

お知らせ

◆高岡市立博物館に親しむ会総会&講演会
 4月24日(金) 午後1時30分～午後3時30分
 ※4月上旬に開催案内ハガキをお送りします。